**片桐　よし子 （かたぎり・よしこ）**

**１、プロフィール**

1975(昭和50)年～1995(平成７)年の作品444首の歌集『花曼陀羅』を出版。

＜生没＞

1933（昭和８）年１月２日～2006（平成18）年11月13日

＜代表作＞

○子を悼み生きてゆくべしわが庭の花曼陀羅に忌を重ねつつ

＜青森との関わり＞

1933(昭和８)年青森県弘前市に生まれる

**２、作家解説**

片桐よし子は、昭和８(1933)年１月２日に青森県弘前市に生まれる。昭和50(1975)年勁草短歌会に入会し作歌を開始。昭和54(1979)年１月歩道短歌会に入会。本格的な写生、写実の世界に入る。初期の父の作品には次のような絶唱があり、心に強く響く。

◎もの言へば泪落ちなむ癒ゆるなき父の病床ひたすらに拭く

◎衰へし父を逃れて来し海の春の潮はかがやきに満つ

◎看る吾を労はる父の細きこゑ日に日に低く掠れゆくなり

◎病む父の心に触れむと読みをれど用件のみの文字ふとき文

◎さからひし記憶なければなほさらに父のかたへの寂しさ深し

◎チアノーゼ失せゆき父の息絶えぬあぢさゐの藍しだるる真昼

◎生くるとは慟哭に会ふことなりしあつけらかんと羅漢は笑ふ

◎凛々と仕事こなしし日の父も職退きて酒に浸りしもちち

◎晴ればれと未来を語る子らと居て逝きし子思ふ夕餉の卓に

作者の何気無い日常詠にも勝れた作品が多い。片桐よし子は津軽女流歌人の「火の会」「真朱の会」何れも福井緑主宰等に積極的に参加して、切磋琢磨、研鑽を積み大きく開花した。その成果は東奥日報社主催の短歌大会で第１位が４度あり、青森県知事賞４回の受賞は今尚広く語り継がれている。東奥日報社、陸奥新報社の文芸欄の短歌部門の選者として活躍。当然県内の短歌大会でも選者を勤めた。

◎水底に咲く花の界あるごとくさくらを映す濠ばたをゆく

◎流木を置き去りにして引く波の気泡の粒子が日にかがやけり

◎春の夜の丘登りつつ見上ぐればうるほふ星のひかりは近し

これは短歌の本道を歩み続けた、片桐よし子の秀詠である。急逝はその才を業績を知る者にとっては痛恨の極みであった。